

問題1

\*目標\*

- 一 自分勝手に文章を読むのではなく、筆者の立てた筋道を追って、筆者の主張を正確に読み取る力を養成する。
- 二 論理的に考え、読み取ったことを論理的に説明する。
- 三 正確で、筋の通った文章を書く。
- 四 古典への関心を深める。

■解答

- 問一 ウ
- 問二 そこから悲
- 問三 過去→現代（現在）
- 問四 ア A イ B ウ A エ A オ B
- 問五 人を愛すれば愛するほどその人を死に追いやってしまう。
- 問六 宮中では死が汚れたものであり、助からないと分かった桐壺更衣を留めておくことができなかったから。

■解説

問一 論理的読解力B「文章全体の論理構造」  
冒頭の「文学を鑑賞するとき、忘れてはいけないことがある。それはその時代背景を頭に置いて理解することだ。そのためには、想像力こそ何よりも不可欠である。」が、筆者の主張。以下、その具体例として「源氏物語」を挙げ最後にもう一度筆者の主張を繰り返す論理構造である。

問二 論理的読解力B「欠落文挿入問題」

一箇所欠けた文を元の場所に戻せという問題で、これは文章全体の論理構造を掴まえる力と文脈力の両方が問われる問題である。

まず欠落文の冒頭の、逆接「ところが」をチェック。ここから、欠落文の前には「帝が桐壺更衣を愛してはいけない」といった内容が来ると分かる。

「つまり、誰も本当に愛してはいけないのだ。」が、該当箇所。次に、この直後に欠落文を挿入すると、直後の「そこから悲劇が生まれる」とある「そこ」の指示内容が、欠落文中にないとおかしいことになる。そこで検討すると、「桐壺更衣を死ぬほど愛してしまっただ」が、指示内容だと分かる。そこから悲劇が生まれたのである。

このように接続語や指示語など、文法的根拠を手がかりに、文章を客観的に扱わなければならない。

問三 論理的読解力B「論理的な間違いを指摘する」

まず「後半で」といった条件を忘れないこと。本文末尾に「過去に生まれた作品を、過去の価値観で語ったところで、やはり真の鑑賞とは言えないのだ。」とある。

この箇所は筆者の結論部分であるが、筆者の主張は、「過去の作品は過去の価値観で鑑賞せよ。決して現代の価値観で捉えてはいけ

		測 定	す る 能 力
論理的言語力	論理的読解力A	文章を論理的に読む力。 一文の構造を論理的に掴まえ、趣旨を的確に把握する力。 「ことばのつながり」、小説などを客観的に読む指示語、接続語などを論理的に力。	文章構造を論理的に読む力。 文章構造を論理的に解説する力。文と文との論理的整理し、まとめる力。話す力。論理的に思考し、関係、段落と段落との論理論理的に説明する力。自分の考えを論理的に書く力。
	論理的読解力B	文章構造を論理的に読む力。 文章構造を論理的に読む力。 文章構造を論理的に読む力。	文章の要点を論理的に他者に向かって、論理的に説明する力。文と文との論理的整理し、まとめる力。話す力。論理的に思考し、関係、段落と段落との論理論理的に説明する力。自分の考えを論理的に書く力。
	論理的思考力	文章構造を論理的に読む力。 文章構造を論理的に読む力。	文章の要点を論理的に他者に向かって、論理的に説明する力。文と文との論理的整理し、まとめる力。話す力。論理的に思考し、関係、段落と段落との論理論理的に説明する力。自分の考えを論理的に書く力。
	論理的表現力	文章構造を論理的に読む力。 文章構造を論理的に読む力。	文章の要点を論理的に他者に向かって、論理的に説明する力。文と文との論理的整理し、まとめる力。話す力。論理的に思考し、関係、段落と段落との論理論理的に説明する力。自分の考えを論理的に書く力。

問題2

\*目標\*

- 一 小説を主観を入れずに、客観的に読む力を養う。
- 二 話の筋道を理解する力を養う。

■解答

- 問一 イ
- 問二 妹は一牧人を花婿として迎える。
- 問三 から
- 問四 イ
- 問五 a エ b イ c ウ d ア
- 問六 ウ
- 問七 ア
- 問八 ここへ 結婚式を
- 問九 おくれ
- 問十 地団駄

■解説

問一 論理的読解力B「文と文との論理的関係」  
空所の前に、「メロスは政治が分からぬ。」とあるのに対して、空所直後は、「邪悪に対しては、人一倍に敏感であった」あるので、逆接。

問二 論理的思考力「一文の要点をまとめる」

一文の要点は、主語と述語、目的語である。主語は「妹」、述語は「迎える」。目的語は「一牧人を」。後は、字数条件に合わせて、飾りの言葉を削ればいだけである。

この妹は、村の或る律気な一牧人を、近々、花婿として迎える事になっていた

問三 論理的言語力「助詞」

空所直後の「訪ねて行くのが楽しみである」の理由が、直前の「久しく逢わなかった」なので、因果関係。理由を表す助詞「ので」「から」「ため」だが、その中で空所前後の文と日本語としてつながるのは、「から」だけである。

問四 論理的言語力「言葉のつながり」

( 3 ) は、まちの様子を形容した言葉が入る。その様子は直後に、「もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。」とあるので、「ひっそり」が答。

問五 論理的読解力B「整序問題」

まず誰の台詞かを考えること。メロスと老翁との会話である。  
a メロスの「何かあったのか」「まちは賑やかであった筈だが」に対する老翁の返答だから、エ「王様は、人を殺します。」  
b 老翁に対する台詞だから、「なぜ殺すのだ。」。

ない」といったものである。  
そこで「過去の価値観で語った」が論理的に矛盾していることが分かる。

問四 論理的読解力A「文章の内容を理解する」

- ア 帝は一人も真に愛することができないのだから、現代の価値観A。
- イ 当時は、後宮の女性は政治権力と結びついていたので、当時の価値観B。
- ウ 「平安時代のお姫様はくロマンティックな世界に生きているわけではない。」とあるので、現代の価値観A。
- エ 一人の女性を愛することでさえ自由ではなかったので、現代の価値観A。
- オ 帝は桐壺更衣を愛することで彼女を死に追いやったので、当時の価値観B。

問五 論理的読解力A「文章を論理的に理解する」

p3・19行目「人を愛すればく臣下に下ろすしかなかった。」

因果関係を示す「だから」に着目。

「だから」は、その前に理由が来ることを表す接続語である。帝はかつて桐壺更衣を愛したがゆえに、彼女を死に追いやってしまった。だから、光源氏に対しても同じ過ちを犯すまいとして、あえて光源氏を臣下に落としたのである。

「三十字以内」「一文」という条件を見落とさないこと。

問六 論理的思考力「理由説明」

p3・11行目「今まで桐壺更衣はく一途に愛していたのだ。」  
ところが、今度ばかりは承諾せざるをえなかった。なぜなら、宮中は死を汚れたものとして忌み嫌う。つまり、桐壺更衣がもう助からないと分かったからこそ、里下がりを許可したのである。」が、該当箇所。

- ① 宮中では、死を汚れたものと 忌み嫌っていたから。
- ② 桐壺更衣がもう助からないと分かったから。

この二つがポイント。  
当時、帝が住む宮中は汚れない神聖な場所、死は絶対のタブーだった。宮中に出入りする貴族のその家族に死者が出ただけで、その貴族はしばらくの間宮中に上がることは許されなかったのだ。

桐壺更衣も宮中で死ぬことは許されなかったのである。更衣がもう助からないと分かったからこそ、帝は泣く泣く里下がりを通じたのだ。  
帝は愛する人が臨終を迎えるとき、その側についてやることさえできなかったのである。

## 問題Ⅶ

この二つの条件を満たしていれば、すべて○。「自分で考えて」といった条件を見落とさないこと。

### \*目標\*

- 一 討論において、話の筋道を理解する力を養う。
- 二 文章の内容を理解し、それに即して自分で考える力を養う。
- 三 正確で筋の通った日本語を書く力を養う。

### ■解答

- 問一 C君、D子  
問二 1 帰属意識 2 個人 3 規則 4 自主性  
問三 解答例  
賛成
- ・学校の外で校則違反をしたときに学校に知られやすいから。
  - ・試合などの時、同じ制服を着ていると一体感が生まれるから。
  - ・私服だとお金がかかったり、貧富の差が生じてしまうから。

### 反対

- ・いつも同じ制服を着ていると、汚れやすく不衛生だから。
- ・決められた服だとファッションセンスを磨くことができないから。
- ・それぞれの個性をファッションによってアピールできないから。

### ■解説

問一 論理的読解力A「人の話の筋道を理解する」

C君「人によって決めつけられるなんて、いやだな。」という発言から反対。D君「何でも決められたとおりなら、自主性も芽生えないし、自由がなくて窮屈だわ。」という発言から反対。

問二 論理的読解力B「論理的関係を読み取る」

- 1・2 先生「帰属意識を持つことが出来る」と、C君「ファッションって、個人のもの」とが、対立関係。  
3・4 B子の「自主性を主張するよりも前に、規則を守ることができるようにすることの方が大切だ」を掴まえます。

問三 論理的表現力「自分の意見やその理由を書く」

「討論会の内容以外」「自分で考えて」という条件を満たしていれば、基本的に○。「ので」「から」「ため」で終わってなければ、理由を説明したことにならないので注意すること。

以上

問六

論理的言語力「副詞」

c それに対する、老爺の台詞だから、ウ「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持っては居りませぬ。」  
d 残った「たくさんの人を殺したのか。」  
が、答。その直後に、それに対する老爺の返答があることに着目。

問七

論理的読解力A「文章の内容を理解する」

「やがて」はある程度時間がたったときに使う言葉。「ついに」「とうとう」はかなり時間がたったときに使う言葉。  
空所直後の「人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」といった国王のセリフから判断する。誰も信じていけないのだから、「孤独」が答。

問八

論理的思考力「一文の作成」

「言葉のつながり」を考える。「ここへ」は「帰ってきます」にかかり、「結婚式を」は「挙げさせ」にかかるので、語順を入れ替えないといけない。

問九

論理的読解力A「文章を論理的に理解する」

直前に国王のセリフで、「いのちが大事だったら」とあることから考える。メロスが日没までに帰ってこなければ、身代わりが処刑され、メロスの命は助かる。人を信じられない国王は、メロスが故意におくられてくると思っているのである。直後の「おまえの罪は、永遠にゆるしてやろうぞ」からも判断できる。

問十

論理的読解力A「言葉のつながり」

直前の「口惜しく」が根拠。「地団駄を踏む」は慣用表現で、口惜しくて仕方がないときの表現。

## 問題Ⅵ

### \*目標\*

- 一 文章を論理的に読む力を養う。
- 二 文章の論理構造を分析する力を養う。
- 三 正確な日本語で筋の通った文章を書く力を養う。
- 四 文章の要点を読み取り、そこから自分の考えを發展させる力を養う。

### ■解答

問一 ア

問二 では、今度

問三 第二ところが、第三 それゆえ、

問四 第一段落 人間はもともと自然界に適應しない肉体を持って生まれついた。

第二段落 人間は道具や機械によって自然界で生き抜くことができた。

問五 解答例 原子力発電 核兵器(兵器)

遺伝子操作 環境破壊 ロボットなど

### ■解説

問一 論理的言語力「一文の構造」

一文を論理的に把握・分析する力。  
まず「手放すことができない」とつながることに着目。

次に「人間は手放すことができない」が主語と述語の関係で、一文の要点。後は、どの言葉がどの言葉につながるかを考える。

「もはや手放すことができない」「道具や機械をく手放すことができない」となる。

問二 論理的読解力B「欠落文挿入問題」

欠落文の冒頭の「つまり」に着目する。「つまり」は、まとめの言葉。そこで、「人間が食べる側に生まれついていない」話しがどの辺りなのかを検討。

「では、今度は食べられる側として考えてみよう。」から、「食べられる側」の話に変わっている、その直前までが「食べる側」の話だと分かる。

問三 論理的読解力B「段落分け」

段落分けの問題は、文章の論理展開から考える。  
まず冒頭「人間は弱肉強食の自然界において、食べる側なのか、食べられる側なのか。」と、問題提起。筆者はその答を筋道を立てて説明しなければならない。

その答が「食べる側でも食べられる側でもない」であり、それゆえ「絶滅してもおかしくない」となる。ここまでが第一段落。

次に、逆接の「ところが」で、文章の流れを引つ繰り返す。人間は自然界において絶滅してもおかしくないのに、「何と逆にこの自然界を支配してしまった」のである。その理由が「道具」である。そして、次に筆者はその具体例を挙げ、「私たちは自分の働きを機械に与え、巨大化することで、初めて自然の中で生きのびることができたのだ。」としている。ここまでが第二段落。

最終段落は、「それゆえ」からで、その機械が人間を滅ぼす方向へ発達したとしても、私たちは機械を手放すことができないと結論づけている。

問四 論理的思考力「要点をまとめる」

第一段落「食べる側」の話と、「食べられる側」の話をまとめたものが、「弱肉強食の自然界には適應しない肉体を持って生まれてきた」となる。

第二段落「人間は道具を持つことで初めて自然界で生き抜くことができた」が要点。一般化された表現と具体例とを見分けること。

第三段落 結論部分。末尾の「人間の制御下から自立し、その先に人間を滅ぼす方向へ発達しようとも、私たち人間はもはや道具や機械を手放すことができないのである」が、最終結論。

問五

論理的表現力「筆者の考えをもとに新たな問題について推測する」

- ①人間がつくったもの
- ②人間を滅ぼす可能性があるもの